

菅原百合絵歌集

『たましひの薄衣』

(書肆侃侃房)

言葉の起源は歌だという。その言葉を思い出させる韻律とイメージの豊かな第一歌集。

魂を揺らす鞆たもとしづかなりサン・サンスのスワンの眠り

初句の「魂を揺らす」、三句の「しづかなり」で鞆たもととスワン、眠りの様子が引き出される。流れてゆく韻律、下の句のサ行の重なりが転調するところも魅力的だ。

スカートの裾ゆつたりと捌きつつ春のねむたき坂くだりゆく

電車にて隣り合ひたるおほき背を父とも思ひしばし凭るる

今しがたわれに触れぬしひとの手が川の光を指してきらめく

真正面から自らや対象を詠むのではなく、すこし横から輪郭を描いていく。正面から対峙しないことは、対象をぼんやり描くことではなく、真正面からでは取りこぼしてしまふ間合いや息遣い、ためらいや拍動を伝える。

マドレーヌ紅茶に浸しいつまでも触れえぬあなたの心と思ふ

作者はフランス文学の研究者でもある。この歌のようにフランス文学作品の引用も美しい。読み手の魂、世界の魂そして言葉の魂に近づこうとする歌集だ。(斎藤美衣)

安田茜歌集

『結晶質』

(書肆侃侃房)

ときに実景と幻は地続きである。作者が踏み込む景の奥の世界には、深い広がりがある。

くらがりで月のランプを点けたのはくらがりにいるわたしの右手

スリッパを廊下のふちにかさね置くすぐそこにいる不在のために

ゆつくりとした不思議な時間が歌に流れる。そこには、哀しみとともに柔らかさや温かみが漂っている。

ひっそりとうごく心の暮れかたのぶらんこに乗る大人のおふたり

身体と冬を暮らして身体が泣くからきょうはギターを抱いた

ぶらんこやギターといったなつかしい雰囲気のある素材で際立つ、生身の人間の切ない姿がある。

窓ガラスでいねいに拭く 身が粉になるなら瑠璃色がのぞましい

手記めくるひとさしゆびにあかるんで紙と雪では白さがちがう

薄青のまちにすむひと薄青のみずをひとくちふくんでねむる

色彩を使って紡がれた作品に表れる、作者の内面や繊細な感性に心惹かれる。(柴田佳美)